

入選

水を考える

栃木県 大田原市立野崎中学校

一年 沼野井 志穂

キラキラキラ。

太陽の光を浴びて、水面の水が輝く田んぼ。まぶしい。そして、きれいだ。今は、ちょうど田植えの季節。

一年前を思い出す。

私は毎日、この田んぼの前の通学路を登校班の先頭に立って歩いていた。

「オタマジヤクシがいるよ。」

「こっちにもいるよ。」

「どこ、どこ？」

無邪気な下級生達の元気な声。後をふり返れば、寝そべって身を乗り出している下級生達がいる。見つけると、つかまえようと手をのばす。届かないのに頑張っているその一生懸命さに思わず笑ってしまう。傘を持っている日には、カエルの背中やオタマジヤクシをつつこうとしては、逃げられてしまっている。そして、今にも田んぼに落ちそうになる。見ている私もひや汗ものだ。

私の住む大田原市は、田園風景が広がり、多くの水田がある。私は、小学五年生の時、総合の授業で米作りを体験した。田んぼには、オタマジヤクシがいる。カエルが、アメンボがいる。ゲンゴロウもヘビもいる。そして、ホタルイというホタルの住むようなきれいな水があるところに生息するホタルイの種が生えている。このきれいな水は、動物を呼び、植物も呼び、また人間をも呼ぶ。私は、田植えをして、水の力を感じた。

このきれいな水の元は、那須疏水である。一八八五年に作られた那須疏水は、供給対象面積が約四三〇〇ヘクタールと、とても広く、日本三大疏水の一つと数えられている。

そのような那須疏水の作られた場所、那須野ヶ原は江戸時代までは、広大な荒地に過ぎなかったし、那須野ヶ原中央部は、扇状地特有の礫層が厚く堆積し、地下水は深く流れ、大雨の時以外は全く水がなかったそうだ。山崎北華は、「続・奥の細道」でこのように記していたそうだ。「那須野は聞きしに違わず、(中略)

草も長からず、木というものは木瓜さへもなし、炎暑の折等何処にぞや、手に掬う水もなし……と。

明治時代になり、水路開削工事が開始され、那須疏水が完成した。

この那須疏水により、今は、有数のお米の生産地となっている。

私はこの那須疏水を守るために何をすべきだろうか。何ができるのだろうか。私は最近、那須疏水の前を車で通った。とてもきれいな水が、どこまでも流れていた。しかし、それとは別に、私はポイ捨てをよく見かける。タバコのすいがらや、空缶、ペットボトルのキャップなどが捨ててある。時には食べかけのおかしや飲みかけの飲料水がちらばっている時がある。それを見ると胸が痛む。その一方で、地域ではごみ拾いを行っている。「ポイ捨て禁止」も呼びかけている。そうして、那須疏水のきれいな水は守られている。

今の私にできることは、ごみを捨てないことはもちろん、地域でのごみ拾い活動に参加したり、このように作文を書いたりして、意識を高めることだろう。それらを行うことにより何かが変わるのではないだろうか。一人の力では小さくても、多くの人で協力し合えば、大きな力になる。私は、水がきれいであり続けるために、水を大切にすることの輪を広げたいと思う。それはまた、安心・安全な食につながるのだから。

「おはよう。」

友達の声で、「はっ。」と、我に返る。

キラキラキラ。

輝く田んぼは、私を「行つてらっしゃい。」と見送ってくれるようだ。